

聖化

Japan Holiness Association

【発行】日本聖化協力会

2011.10.15

No. 50



始めも終わりも「信仰」

関東聖化交友会会長

竿代 照夫

「あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。……御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるのでしょうか。……アブラハムは神を信じ、それが彼の義とみなされました。それと同じことです。ですから信仰による人々こそアブラハムの子孫だと知りなさい。」

(ガラテヤ三・2-8)

今年、お招きを頂いて色々な場所で聖会の当務をさせていただきました。集会の前後に会衆とお話する機会が与えられたのですが、多くの方が、「聖化」を「神の恵み」と捉えるよりも、到達すべき目標として捉えておられるという事に気づきました。「自分がきよめられないのは、献げ切っていない分野があるからだ」と自己吟味を繰り返したり、あるいは、「きよめの信仰に立ったのだが、その後の歩みがいい加減なために、その信仰を失ってしまった」と自分を責める傾向です。

確かに、聖化を目標と捉えて励むことは良いことです。また、全的献身が聖化の条件であることも確かです。さらに、聖化の転機を経た後にも、「光の中を歩む」真実な歩みが求められています。しかしながら、救いが与えられるのは、価値なき

者に無代価で与えられる神の恵みによる、そして、それを単純に受け取る私たちの信仰による(エペソ二・8)というのが聖書の大原則です。

人間は、恵や信仰に何かを付加する傾向を持っています。神に喜ばれる生き方をしようとする努力や、律法に従って正しく生きようとするがんばりがややこしい問題を生みます。聖化の転機を経たがずれてしまったという落胆、誘惑を感じただけでも罪を犯してしまったという自責感などが活き活きした信仰生活を妨げます。しかし、パウロは、あらゆる形の律法主義を戒め、救いのはじめも成長も完成も信仰によると語ります。

『恵みを知らないクリスチャン』という著書の中でデイビッド・シーモンズは、「人間が神に明け渡さなければならぬ最後の砦は、自分は自分を救えないと認めること」だと指摘します。さらに「罪を悔い改め、野心を献げ、金銭、肩書き、名声、安逸などすべてを喜んで献げ、明け渡しても、最後まで献げられないで頑張るのは、神との正しい関係を保つために自分にもできることがある」という自信です」と語っています。私たちは何も出来ない、ただ主の恵による、その恵にすがる信仰による、この信仰に徹して進みたいものです。

もくじ

- 巻頭言メッセージ…………… p.1
- 書評「神の物語」…………… p.6
- 論説：教会建設とホーリネス…………… p.2-3
- 本の紹介、カニンガム博士紹介…………… p.7
- 証し：三つの十字架と愛…………… p.4-5
- 2012年講師の紹介、編集後記…………… p.8



東京若枝教会 飯塚 俊雄

今回は、牧会歴50年を迎えられた飯塚俊雄先生に、教会建設でのホーリネス信仰の意義について、ご経験を交えて論説を執筆いただきました。

論説

教会建設とホーリネス

「宇宙で最も大切なものは何ですか」と問われたら、「神なるイエスがご自分のいのちに代えて愛された教会です」と答えましょう。歴史の流れは、実に「しみもしわもない栄光の姿となった教会」をみ前に立たせようとされる主イエスの贖いのご意志のもとに、そのゴールを目指して進んでいるのです。ですから、使徒パウロがひざをかかめ、「父」の前に祈る姿を心に描くたびに、永遠の神がイエスに受肉して遂行されたその愛を、だれもが日ごとにより深く知り、もっと熱烈に感動して欲しい、心狂わんばかりに。

うお方が、人間の繰り出す醜さと恥辱の修羅場において来て、わが心の深淵にまで宿り、栄光の望みとなられたと確信を与える愛なのです。その高さは、もろくて無力でなりに過ぎない私たちが神の息子、神の娘とし、永遠の勝利者として押し立て、確定する愛です。いや、すでに神の愛子、キリストに似た者として扱ってくださいる愛です（1ヨハネ四・17）。

いたとは、私たちとは一体何者ですか。気も遠くなるほどの身分。畏怖させる神さまの愛。そして、主の栄光を見るようにと祈られ、主と同じかたちに化する歩みを期待されている存在なので。ですから、教会建設、牧会の目的は、すべての信徒に聖徒としての自覚を与え、奉仕のために整え、キリストにある「全きもの」として、み前に喜びをもって立たせることではないでしょうか。そして、その責任は牧師として召された自分にあるという使命感です。そのためには、自分の内に、明確な動機づけが不可欠です（コロサイ一・25）。これが第一です。つまり、神のご計画の全体を、余すところなく、一人ひとりに語り、植えつけ、徹底することである、と先輩パウロは教えています。さらに、神のご計画を知らせるだけでなく、キリストにある完全な人として、事実、立たさなければなりません。これが第二のポイントです（コロサイ一・28）。このために、内に働くキリストの力によって、労苦しながら奮闘していると言っています。

十字架の苦悶の中で伸ばされた両手の愛は全宇宙を包み込むほどの広さです、が、それはちっぽけなわが心の奥に鎮底する頑なな自我をも、共に釘づけ、粉碎してやまない力でもあります。その愛の長さは、徹底してご意志を成し遂げるために、何でもできる愛、栄光の日まで忍耐強く共に歩んでくださる愛です。その深さは、永遠の主権者ともあろ

十字架が数時間後に迫った主イエスは、祈られました。「父よ。わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下さった人々に、あなたのみ名を明らかにしました。彼らはあなたのものであって、あなたはわたしに下さいました」（ヨハネ一七・6）。永遠のみ父とみ子の間にどのような取引があったかと思えば、なんと、私たちが秘蔵の特選のギフトとしてプレゼントされて

汚れ果てた私たちを、主は、キリストにある義人、完全な人になさいます。この完全という語には二つの意味があります。一つは、肉体が復活、栄化される神の究極の完全であり、もう一つは、信仰生活の初段階において、転機的決断によって与えられるキリスト者としての、あるべき完全です。

4 Hated、至難のわざ。（サタンが放っておきません）ですから、知恵を尽くして、戒め、教えねばなりません。教育と訓戒です。うまれたばかりの子は、頭ばかりが大きい。しかし成長するに従って、頭の大きさにふさわしい体格となって来ます。

く、神の大目的である教会のあるべき姿であると言われますが、教会の働きは、具体的にはそれを担う人から切り離すことはできません。だから、パウロは、「わたしを見習ってほしい」とまで言うのです。

春先の青いオレンジでも虫つかずの完全さを身に帯びているなら、その時点での完全であり、秋の黄金色の見事な成熟は確実なのです。今、ここにおける決断を大切にして、主に明け渡しに行くなら、約束通り主は聖霊をもって臨み、支配し、満たし続け、だれでも、キリストにある成人になれます。

かしらなるキリストの身だけに達するために、神の側では、ご本質が三位一体であるように、体である教会にも構造、機能を一致・調和させ、次のように言われます。「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられるのです」「からだは一つです。それに多くの部分があります。私たちはみな一つのからだとなるように、一つの御霊によって、バプテスマを受けたのです」。

1 聖徒たちを整える。教会の秩序の中で、与えられた賜物を他者との関係の中で、円滑に發揮することです。「十字架の形をしたホーリネスは、自己実現的でなく、本来、他者中心的、協調的である」(Holiness and Ecclesiology in the NT, Kent Brower, P.164, 2007)、謙虚に忍耐強く、気分をコントロールすることが、「完全におとなになる」道です。

- 1 Highest、最高のもの。（人を永遠に結びつける仕事です）
- 2 Holiest、最も聖い仕事。（神の血潮、御霊のみわざです）
- 3 Happiest、最高のしあわせ。（人間として、真にやり甲斐があり

私たち人間の側でも、与えられた賜物を適切に活用することで、神の宮は成長します（エペソ二・21）。そして、かしらにふさわしい体（教会）に到達できるのです。この「完全におとなになって」という概念は各個人についての言及ではな

教会成長は人集めの知恵や技術の改良による数量的な伸びにあるのではありません。むしろ、苦難や試練の中で、みな一致団結し、祈りと明け渡しによって、教会の成熟度を自分の使命として歩むことにあります。2 奉仕のわざをする。聖徒たちを整えるのに、奉仕へと教

会を総動員するためです。キリスト者なら誰でも必ず一つの賜物をあずかっているからです。3 愛によって建て上げる。キリストのからだを建て上げるため。これが、私たちのすぐわれた究極の目的です。ここでパウロは、私たちはもはや子どもではないと言い、あらゆる点において成長するよう励ましています。子どもは感化されやすく、欺かれやすく、不安定です。しかし、ホーリネスを生きる群れは、子と向き合い、信仰と知識の一致という教育面、幼稚性を克服するのための訓練と戒規という面、そして愛をもって真理を語る相互の交わりこの面というふうには、成長して行きます。これこそおとなとなった教会の姿であり、この要に対する底力です。4 成長する「体全体は愛のうちに建てられるのです」。愛によって結ばれ、愛に依って働く教会は、幹に連なる枝々が主からの豊かな供給を受け、主が「わたしの教会を建てよ」と言われた通りの、真の教会の姿となって行きます。

1. 罪の赦しの十字架

私が洗礼を受けたのは中学二年生のクリスマスでした。淀橋教会の小原十三司牧師から洗礼を受けました。クリスチャンホームのために小学校から熱心に教会に通い、中学で繰り返し聖書を読み、この救いの道を生涯歩もうと決心していましたので、日曜学校の先生からの勧めを喜んで受け入れ、洗礼を受けました。しかし、本当に自分の罪の赦しの十字架を信じるようになったのは後のことでした。中学生の時に聖書を繰り返し読み、ローマ人への手紙一四章八節の「生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです」が与えられました。生涯最初のみことばでした。中学生の心にこのみことばが響きました。高校三年生の卒業間近の一月ごろに、日曜学校の時間に献身のみことばが与えられました。「みことばを宣べ伝えなさい」(第二テモテ四・二)とのみことばが心に響いて、離れないのです。しかし、それは同時に自分の罪に苦しんだ最初の経験でした。とても自分のみことばをお伝えするような者ではない、ふざしくないという思いに駆られ、とても無理ですと、自らの罪を重く認める時となりました。みことばに押しつぶされるような思いで日々を過ごし、大学受験にも失敗して、悶々とした日々を過ごしていました。この間に示された罪と関係する人々を訪問して謝罪したり、手紙を書いてお詫びをしました。

2 自分の死の十字架

その夏の夏期聖会で初めて、「わたしは神に対して生の闇に包まれたのでした。車に引き上げた私たちに、しばらくして黒い雨が降りだしました。この時、私は圧倒的な天地創造の神を信じたのです。小さな心でしたが、天地創造の神はおられると重く受け止めたのです。そして、これからは生涯日曜日は守ろうと決心したのです。さつそく秋の運動会が来て、私の決心が試されました。私はだれにも相談せずに、まず日曜学校に行ってから、運動会に行こうと決心しました。そして、教会から運動会に向かいました。途中から運動会のレコードが聞こえてきました。先生からどのように言われるか分かりませんが、覚悟を決めていました。その不安な道の途上で、「終わりまであなたの道を行きなさい」(ダニエル二・13)と心に響いてきました。

それは私にとっては大きな大きな励ましでした。小さな心の決心を後押ししてくれるような感謝なことでした。それ以来、大学を卒業するまで、学校よりも教会生活を守ること決断し、学校が、また社会が自分をどう評価してもかまわない、私はこの道を生涯歩もうと決心したのでした。

4 キリストの愛の経験

神学校を卒業して最初に遭わされたのが、三重県の尾鷲教会でした。隣町にも尾鷲の檜の伝道所が完成して、園長と二つの教会を受け持つ、多忙な日々となりました。ある時、隣の駅舎で、中学生二人を発見して、話しを聞いたところ、何日も家を出、川原や鉄橋の下で野宿している、最初に警察が中学校に入った尾鷲中の子どもた

きよめの証し

三つの十字架と愛

ウェスレアン・ホーリネス教団
ひばりヶ丘北教会 小寺 徹



きるために、律法に対しては律法によって死んだのです。わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」を示されて、罪に苦しんでいた私は、このみことばを心から信じ受け入れました。浪人の身でしたが、その聖会後から、早天祈禱会に出席するようになりました。聖書を読んでも、今まで以上にみことばが開かれるようになり、難しかった小原先生の説教が今まで以上に心に響くようになり、感謝と喜びに満たされ、うれしくて飛び上るような気持ちで日々を過ごしていました。教会から遠ざかっていた父は息子の変貌ぶりに驚いて、小原先生に手紙を書いて、息子にもっと大学受験のための勉強するように言っていたいと伝えたほどでした。心はもうすでに神学校に行きたいと願っていました。

3 自分の十字架を負う

私が生涯この道を歩もうと決心したのは、小学校六年生の夏でした。その夏、友人の数家族と友人の軽井沢の別荘に行くことになりました。軽井沢での最後の訪問地は浅間山でした。朝、浅間山が目の前にそびえる浅間牧場で眺めていると、山から白い煙が出ていました。しばらくすると地面が大きく揺れ、地響きがして浅間山が大爆発をしたのです。目の前で繰り広げられた大自然の圧倒的な光景は、生涯忘れることはできません。そして山から吹き出た膨大な噴煙は地面に向かって降りながら目の前に迫り、また天高くそして広く拡大し、ついに全

ちであることが分かり、教会で預かりました。しかし、それぞれの親は関わりを絶ち、放任している子どもたちであり、悪を重ねて、少年鑑別所に行くかどうかの瀬戸際の子どもたちでした。振り回される日々が続き、二つの教会のそれぞれの集會をしながら、牧師家庭ではとても扱えない子どもたちのために悲鳴を上げている中、私もどうにもならなくなっていました。夜もたたき起こされるような時もあり、気力も体力も失せながら、車を運転して隣の集會に行く途中の山道で、涙が出てきました。「主よ、私には負えません。どうにもなりません。主よ助けてください」と繰り返し、繰り返し叫んでいました。その時に、「あなたの苦しみを知っている」(黙示録二・9)と心に響いたのでした。今度は喜びの涙が溢れて、溢れて止まりませんでした。主が小さな私を知って、支えてくださる、愛してくださっているということが分かったのでした。問題はそのまま継続しましたが、心には解決が与えられたのです。

イスラエルの民がエジプトで試練に遭った時にその苦しみを見、叫び声を聞き、その痛みを知った神は、「わたしはある」という名であることを宣言され、主は「わたしはある」と語られました。日常生活のただ中で主は今も「わたしはある」と約束され、「世の終わりまでもいつも共にいる」と約束してくださっています。この「わたしはある」と言われる主を生活のただ中で経験しつつ、信じ従う者でありたいと願っています。



日本聖化協会出版委員会 2011年発行

神の物語 THE STORY OF GOD

マイケル・ロダール著 大頭眞一訳
352ページ 定価：3,500円+税

●●● 新刊書『神の物語』は、ウエスレアン神学を現代に語る、新しい組織神学の教科書です。物語神学の切り口で、聖書に流れる一貫した聖化のメッセージを提示してくれます。

書評 藤本 満 (インマヌエル高津教会)



来年の聖化大会に、米国ナザレンの神学者・説教者マイケル・ロダールを迎えます。それに先かぎって、今年、彼の著作を出版します。

翻訳は、日本イエス・キリスト教団の大頭眞一先生によるものです。彼は英国の神学校で学んでいた頃、この本に神学の教科書として出会い、それに魅了され、どうしても邦訳をと、翻訳を聖化協力会に持ち込まれました。

優れた本です。この本を聖化交友会出版から出すことができることは榮譽あることだと思っています。

聖化を学び、生きようとする私たちがですが、聖書の教えを離れて、どこか教義的に聖化を捉えてしまうことで、教会が傷つき、聖化の教えそのものが傷つくことをしばしば体験してきました。本書の第二版(一九九四年)の副題には、「Wesleyan Theology & Biblical Narrative (ウエスレアン神学と聖書の物語)」とあります。神学を聖書の物語で解説していくという手法を用いて、私たちの心にうなずきを与えながら聖化を説き明かしてくれま

す。それが、本書が英語圏で高い評価を受けた理由の一つとなっています。

私たち読者は、哲学者でも神学者でもありません。そんな私たちに高邁な神学の講義を聴かせてくれても頭が痛くなるばかりです。ロダールは聖書の物語に慣れ親しんでいる私たちに、「難しい神学も、こうして読むと心に届くよ」と言わんばかりに、説教をするかのように、聖書を解き明かしながら、神学の主題・神学の課題へと私たちが連れて行ってくれます。

私がこの書にもう一つ魅力を感じる理由は、この本がウエスレアンの立場を大胆に現代に生かすことに情熱を燃やしていることです。単に、ウエスレアの神学を解説してくださいと頼まれれば、冒険は必要ありません。正統的な枠組みで、歴史資料に忠実に、自分なりの解説を試みるができます。

しかし、ウエスレアン神学の立場にあつて、現代のさまざまな課題を意識しながら神学を語ってくださいと言われたら、大きなチャレンジに怯んでしまいます。私たちはこうしたチャレンジを受けて立つには、あまりに応用力に欠け、また現代の課題に取り組み能力に乏しく、不資格だと自分の不勉強に恥じるしかありません。

ですから、著者ロダールが、歴史神学・世界宗教を講じるオールラウンドな学者であることに注目すると本書の味わいも深まります。本書にあるユダヤ教と東方キリスト教に関する洞察は、優れたものです。神が人を創造し、人の罪に傷つけられながらも、人と共に働いて世界を贖い、やがてそれを完成されるという物語は、聖書全体を概観し、教会歴史の豊かな広がりを見事に描いています。

ロダール博士自身の、学者としての挑戦的な試み、楽しみを、私たちは本書を通して直に味わい、また刺激を受けることができますと信じています。

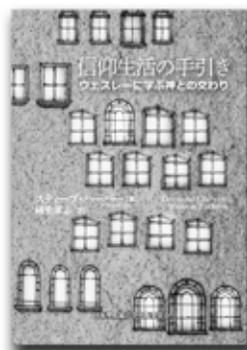
翻訳の労をとられた大頭眞一先生も、物語の調べを日本語で語り直すことに十分成功したと言えましょう。短

いリズムカルな文章の積み重ねは、ひらがなを多用する試みと相まって、歯切れ良く、物語のテンポを大切にしているように思います。

大頭先生自身の神学スタイルが、どれほどロダールに影響され、またそれに基づいて自分自身のスタイルを考え

New Books

出版書籍ご案内



信仰生活の手引き

ステイブ・ハーパー著
國重潔志訳
一、三〇〇円+税

*信仰生活のためのガイドブック
日々のデイポジション(神との交わり)を形作るために——ジョン・ウエスレーから「恵み的手段」を学ぶ——二十一世紀に生きる私たちへの「信仰生活の手引き」。



パウロの生涯と聖化の神学

岩上敬人著
三、八〇〇円+税

本書は、パウロの生涯と年代を丁寧に解説。新約・ローマ時代の「手紙の執筆活動・修辞学」からパウロの手紙を再読。初代教会が直面した課題とその文化的背景からパウロの聖化を詳しく解説しています。

なまじろうくん



©富無尽蔵

今年の聖化大会の講師

フロイド・カニングガム博士プロフィール

Dr. Floyd Cunningham



フロイド・カニングガム博士は一九五四年九月二日アメリカ生まれの五七歳です。イースト・ナザレン・カレッジ、ナザレン・セオロジカル・セミナリー、ジョン・ホプキンス大学で学ばれました。

現在フィリピンにあるアジア・パシフィック・ナザレン・セオロジカル・セミナリー (Asia Pacific Nazarene Theological Seminary) の第五代学長の要職にあられます。

専攻は歴史神学ですが、組織神学や宣教学などの分野でもコースを教えておられ、フィリピンの地域教会の牧会経験もあられ、学的なレベルはもちろんのこと、説教者としても穏やかで静かな口調ながら、内に秘められた熱い思いが伝わってくるメッセージャーです。



2012年 聖化大会に講師としてお迎えする
マイケル・ロダール博士プロフィール
 Dr. Michael Lodahl Ph.D.



ノースウエスト・ナザレン・カレッジ、ナザレン・セオロジカル・セミナリーを経て、エモリー大学で哲学博士を取得。ノースウエスト・ナザレン・カレッジに続き、1999年から現在までポイント・ローマ・ナザレン・カレッジ（サン・ディエゴ）で神学と宗教学の教授として、組織神学・歴史神学・世界宗教を担当。

著書に、Shekhinah/Spirit: Divine Presence in Jewish and Christian Traditions, 1992. Embodied Holiness: Toward a Corporate Spirituality, 共著 2001. God of Nature and of Grace: Reading the World in a Wesleyan Way, 2003, Relational Holiness: Responding to the Call of Love, 共著 2005. When Love Bends Down: Portraits of the Christ Who Meets Us Where We Are, 2006. Claiming Abraham: Reading the Bible and the Qur'an Side by Side, 2010.

.....

各地域の聖化交友会にご加入ください

聖化交友会には教会、あるいは個人でお加わりいただけます。聖化の恵みを教会に、お住まいの地域に広げていきましょう。詳細は各地域の聖化交友会にお問い合わせください。

- 北海道聖化大会・宮城聖化交友会・山形聖化交友会
- 栃木聖化交友会・関東聖化交友会
- 東海聖化交友会・ジョン・ウェスレーに学ぶ会
- 岡山聖化交友会・四国聖化交友会
- 九州聖化交友会

迎える年も、みことばに導かれて！

牧会者、伝道者として、聖書学者、神学者として、幅広くキリストに仕える著者が、時には説教のように、時にはエッセイのように、証しや体験談を交えて神の恵みを語る。

エマオの道で
 365日の霊想



デニス・F・キンロー著
 三、四〇〇円＋税



編集後記

聖化 50 号をお届けします。記念の号にふさわしく、論説として東京若枝教会の飯塚俊雄先生に 50 年にわたる教会経験から「教会建設とホーリネス」と題して貴重な論文を執筆していただきました。また、ウェスレアン・ホーリネス教団の

委員長としてご多忙の中にある小寺徹先生に入信から献身に至る真実なお証しを書いていただきました。編集担当の錦織寛先生の提案で四コマまんがを掲載しました。いかがでしたでしょうか。EPA からのスピリットを引き継いで、JHA でも活発な出版活動を継続しております。（矢木良雄）

.....

聖化 No.50 2011年10月15日発行